

首は、この第三句でゆらいだあと、よく据わった体言止めの下の句へと続いてゆく。「総べて幽けき」というのは作者の眺めた庭前の景であるが、それは同時に作者の心象の風景そのものでもあって、そのような心境から作者は、しとどに露を帯びたわが庭先のただずまいには、すべてに「寂滅の光」がただようと詠嘆するのである。仏教の経文では、煩惱を去って涅槃(nirvana)の境に入ったときに真智の徳が幽かで清らかな光を発すると説き、そうした境を「寂滅」と称し、「寂光」とか「常寂光土」などの語も同じ性格の語として用いている。一連の標題となっている「ほろびの光」は、その「寂滅」、「寂光」の語を大和ことばにしてやわらげたもので、第五首では、それにさらに「寂滅」の漢字を置いたのである。

この歌の境地から言えば、子規に入門して以来、長年にわたって歌に不断の精進を重ねてきた作者は、重厚かつ緊密な声調によって切実な感慨を全力的に表出し、そこに人生の相をも象徴させるところまで至っているのである。この歌が左千夫の最高の傑作とされる理由はここにあると考えられる。

それと同時に、この歌の歌境の深まりが彼の宗教心―浄土信仰―と深く結びついたものであることも、いま行なってきた検討によって明らかである。斎藤茂吉が『左千夫歌集合評』（八重山書店 昭22・10）の中でこの歌について、「此岸に飽くまでも憑つてゐながら、無限のつながりの彼岸とも交通してゐる歌である。」と言っているのも、この歌のこの辺の宗教とのかかわりを指摘したものといつてよい。

これまで見てきたことをここでもとめてみると、左千夫は明治三十三年一月、子規のもとに入門して本格的に作歌に取り組むが、その年

の八月に仏教清徒同志会（のち「新仏教同志会」と改称）の発行する雑誌「新仏教」に歌を載せて仏教とのかかわりをもち、以後、歌や文章をしばしば発表するとともに、同誌の編集にたずさわるようになる。そして、左千夫は同志会と深くかわりつつ、その視点から社会現象を理解してゆくのである。

同会は旧い仏教教壇のあり方を批判することに主眼を置き、国家の宗教への干渉排除、社会の不正に対する指弾、禁酒禁煙の普及活動等にも熱意を示し、成果も収めたのであったが、その活動はどちらかといえば、社会的、外面的なものに傾き、個人的な信仰の内面化、血肉化という点に欠けるところがあつた。

そのため、左千夫の「新仏教」に発表した歌には、社会的関心は認められても内面化という点から見ると観念的、形式的で、全体として文学的完成度において欠けるものが多かったのである。

このように左千夫は宗教問題に関心を深め、それにかかわる作歌や文章を「新仏教」に発表していたが、明治三十七年、親鸞の教えに熱烈な傾倒を示す三井甲之が入門すると、左千夫も親鸞の他力の教えに深く傾倒する。そして甲之の導きで近角常観を識り、「求道」という雑誌とかかわるようになったことも左千夫の信仰をさらに強めることになってゆく。

そして、人生の年輪と照応しつつ信仰の内面化が行なわれるのであり、それが連作「ほろびの光」という仏教信仰が深くかわった作品となるのであって、そこに左千夫の宗教的関心の血肉化、文学化を見ることができないかということなのである。

根岸短歌会の一層の発展を期待したのである。しかし、「アカネ」が発刊されて間もなく、左千夫と甲之の間に性格の上から不和確執を生じ、蕨真のもとから「阿羅々木」(明41・10創刊)が出て、これに左千夫が加わるに及んで、二人は決定的な対立関係に入る。そして、この時期から左千夫の「求道」への投稿は止み、「十九日会」もとだえる。

このように甲之との対立は、左千夫がそれまで行なってきた信仰にかかわる活動に動揺をもたらししている。しかし、明治四十二年十月に発表した「作歌余滴」(「アララギ」二巻二号)と題する文章は、

○一念まをせば八十億劫の罪を滅し、十念まをせば十八十億劫の重罪を滅し云々とは仏書の詞なり、尊くも意味深くも、いと面白き詞かな、或機会に触れて、歌を作らんとの心動き、一念茲に超越したる時、煩惱具足の我々もいつしか人間の心を忘れ、身は陋巷にありながら、思は遙かに闇黒を離れ罪惡に遠ざかる、光明界裏無碍の心神は、恣に詩趣を高天滿地に探るの快に遊ぶ。

あはれ一念の超越、そこに如何なる人も安息し得べきなり、と述べている。これを見ると、ここでも彼の親鸞の教えに対する尊崇は厚いものがあり、煩惱具足の我々もひたすら念仏を誦すれば、いかなる罪も赦されて無碍の光明の世界に達することができ、その歎びをことばにしたのが歌であるとする考え方は、先の「信仰と趣味」(「馬酔木」三巻六号 明39・6)で説くところと同旨で変化はない。

その後も彼は明治四十五年二月には「アララギ」五巻二号で「感想」と題し、また翌、大正二年一月には「新仏教」十四巻一号で「独語録」と題して信仰について述べている。そこで言うところを見ても、左千夫の信仰そのものに変化は認められない。

その後、左千夫は大正元年十一月、「アララギ」五巻十一号に「ほろびの光」と題する歌を発表している。それは

おりたちて今朝の寒さを驚きぬ露しと／＼と柿の落葉深く

鶏頭のやゝ立乱れ今朝や露のつめたきまでに園さびにけり

秋草のしどろが端にものものしく生きを榮ゆるつはぶきの花

鶏頭の紅古りて来し秋の末や我れ四十九の年行かんとす

今朝のあさの露ひやびやと秋草や総べて幽けき寂滅の光

という五首からなる連作で、発表当時から評判になり、近くは本林勝夫氏も「日本近代文学大系44」の『伊藤左千夫・長塚節・島木赤彦集』(角川書店 昭47・5)で「左千夫の最晩年をかざる傑作としてあまりにも有名であり、左千夫を論じてこの一連にふれないものはない。」と述べておられるように、左千夫の絶唱とも評すべき作品である。この五首は、いずれも完式度が高く、傑作の名にそむかぬものであるが、いまは、一連の標題がそこから取られており、全体の結びの役割を果たしているところの

今朝のあさの露ひやびやと秋草や総べて幽けき寂滅の光

の歌について鑑賞しつつ、それを通して信仰とのかかわりを見てゆきたい。

この歌は、まず、晩秋早朝の庭の草にひえびえと置く露に接して、その驚きを「今朝のあさの露ひやびやと秋草や」と初句に字余りを用いて重々しく叙する。第三句の「や」について言えば、左千夫は「叫びと俳句」(「アララギ」大2・4)の中で、芭蕉の俳句において、「荒海や」の句などの「や」という助詞は、単なる切れ字ではなく、深い嘆息がこもっている旨を述べている。この、左千夫の歌の第三句の「秋草や」も、芭蕉の「荒海や」の句などに悟入したものと見られる。一

ているのと同じ考え方である。そしてこの考え方が第一回の「十九日会」で甲之が強く主張して止まらなかったところであったことは先に引用した「馬酔木」二巻三号（明38・5）の「十九日会記事」（左千夫記）が示している。

子規やその周囲でほとんど取り立てて扱われることのなかった「文学と宗教との関係」といった問題について、主宰者である左千夫は、新しく入門した学生の三井甲之から大きな影響を受けたのである。

その結果、子規没後、根岸派の歌人たちが故人を偲んでその忌日である十九日に毎月開いていた歌会も「十九日会」とかわるが、そこではもう歌を作ることは目的とせず、「趣味と信仰との交話」を主とした修養を目的とする会となり、機関誌である「馬酔木」自身も人生、宗教雑誌の傾向を帯びるようになる。

光 三十八年の「馬酔木」に甲之の「●雑言録 宗教と文学」、「文学・宗教」、左千夫の「趣味と信仰」等が載ったことは既に触れたが、それ以後について見ても、左千夫自身が

明三九・一 「巻頭言」・「絶対的人格 正岡先生論」

〃・二 「巻頭言」

〃・三 「巻頭詞」

〃・七 「反省の叫び」・「消息」

〃・一〇 「吾崇拜する子規子」・「信仰と趣味」・新体

詩「曉露光」

四〇・一 「柏尾の大善寺」六首

〃・五 「釈尊降誕祭讃美歌」十一首

四一・一一 「四壁小言」「馬酔木」終刊之消息」

のような宗教色の濃い文章や詩歌を載せている。

この中の「信仰と趣味」（三巻六号 明39・10）は信仰と文学についての左千夫の考えを最もよく示すものと思われるが、ここでは宗教には教義の高尚深遠をもって特色とするものと、人格の感化をもって特色とするものの二つの対照的な傾向が存在するとし、左千夫は後者、すなわち人格の感化を中心とする信仰が「宗教と詩との一致せる境涯にして信仰と趣味との融合最も宣しきを得たる」ものであると説いている。

このように左千夫が信仰と文学との関係について説くとき、その念頭にある宗教は言うまでもなく親鸞の他力信仰、自然法爾の教えであって、はからいを捨てて阿弥陀如来を信じ、如来から授かった念仏をひたすら唱えることによって、如来の慈悲のままに生きる自然法爾の世界が開けるのであって、こうした世界に生きる喜びを言葉でもって表現するのが文学の使命であると左千夫は考えるのである。

そして、左千夫はこうした「馬酔木」における宗教問題の重視について、同誌が終刊するに際し「『馬酔木』終刊之消息」（四巻三号 明41・1）で次のように述べる。すなわち、「馬酔木」は万葉研究においても歩を進めるとともに、趣味と宗教、趣味と人生との関係などについても考えるようになって、文学を人生と深くかわらせるようになり、その立場から「人生を親み自然を傍観する」態度をとるに至ったと言っているのである。この「消息」によって、左千夫がいかに宗教問題を意識的に「馬酔木」に取り上げたかを知ることができる。

「馬酔木」は明治四十一年一月の四巻三号で廃刊し、翌月、「アカネ」を創刊するが、左千夫はその編集、発行をすべて三井甲之にゆだねる。歌才ありと評価し、信仰においても熱烈な甲之を後継者として任せ、

三十年二月には人生問題に直面して煩悶の末、同年九月入信、翌、三十一年東京帝国大学文科大学哲学科を卒業した。三十二年、山県内閣が宗教法案を議会に提案すると、その陣頭に立って反対し、これを不成立に終わらせた。三十三年、東本願寺留学生として欧米の宗教界を視察、三十五年帰国すると、十月には青年に絶対他力の信仰を伝える目的で東京本郷森川町に求道学舎を創設し、「求道」を刊行、特に学生らに影響を与えた。

本郷追分町に住んでいた甲之は、森川町の「求道学舎」は近くでもあったので、東京帝国大学文科大学の先輩にあたる近角常観の講話を聴いていた。甲之が「●雑言録 宗教と文学」（『馬酔木』二巻一号 明38・2・20）に「元来小生が宗教の話しを真面目に聴き候ひしは去年の正月より候、まだ満一年にしかり申さず候」「仏教と申し候ても親鸞上人のことを少し聞き候のみにて他は凡て知り申さず候」と言っているのは、甲之が第一高等学校在学中の三十七年から求道学舎で近角常観に親鸞の教えを聴くようになっていたことをさしている。

こうした左千夫は甲之を介して常観を知るのであって、まず常観の発行する宗教雑誌「求道」の二巻三号（明38・4）に「簞柑子」五首および「三月十七日木下川梅園を看る」五首を発表。これを機縁に、四月十九日左千夫宅で開かれた第一回の「十九日会」には常観が甲之と共に訪れるのである。左千夫は常観の発行する「求道」に

新体詩「春興」一篇

明三八・五

「草庵の若葉」八首

〃・六

「行々子」十首

〃・七

「小園秋来」七首

〃・八

「秋騒一、二」各長歌一首反歌三首

〃・一〇

「孤児の嘆」十二首

明三八・一一

「千本銀杏」十二首

〃・一二

というように毎号作歌を発表してゆくが、また十一月二十六日、左千夫は求道学舎の日曜講話に出席しており、そのあとで常観・甲之らと共に蜂須賀家の書画展覧会を観ている。

このように左千夫は常観の講話を聴いたり、雑誌「求道」を読んだりして他力信仰を強めていったが、このころ左千夫の文学観・芸術観に直接に影響を与えた点では甲之の力が大きかったようである。「馬酔木」二巻五号（明38・9）には巻頭に左千夫の「趣味と信仰」という文章が掲載され、そこで彼は

信仰と趣味との社会に於ける二大動力は、共存併行相抱合相扶掖して益其働を盡ならしむるものなるべく、偏頗孤立は其利用を全ふする所にあらざるは申迄もなき事と存候、（中略）文学を解さざる宗教家は穩健なる能はず、信仰なき文学は強堅ならず

と述べて信仰と文学との併行抱合を説いている。これは甲之が五ヶ月前「馬酔木」二巻二号（明38・4）で

人情の赤裸々一点の偽なき所、迷惑の束縛を脱し候時に五官も精神作用も自由に清らかに活動可致、これ人の動く所感する所と存候、如斯態度の実地世間の人情の上に主観的にあらはれ候もの宗教と可申、如斯態度にて天然及人事現象に對し候感情を客観し候もの即文学なりとも思はれ申候

と言って、宗教とは深遠な教理を解釈することではなく、迷夢を去った人間の平生の生活の中にあり、そうした生活の感情的高揚の結果、おのずと生まれるものが文学であると、宗教と文学を一致させて説い

大きな期待をいだいていることをのぞかせている。

また三十八年一月二十八日付の甲之宛書簡には、初めに「拝啓 先夜ハ長坐失礼致し候」とあり、左千夫が甲之をその下宿先である本郷区追分町二十の西濃館に訪ねて長く話し込んだことを示している。左千夫がわざわざ弟子にあたり、しかも入門して一年にもならぬ甲之を下宿先に訪ねたのは、信仰問題についての論文「文学と宗教」を受け取って、その喜びを直接甲之に言いたかったためであろうと思われる。というのは二月二十八日付の格堂宛書簡に

某大学生とは三井甲之にて小生の二なき話し相手に候、親鸞の信仰者にて甲州の人に候

とあり、二人が夜遅くまで話し合った話題が信仰問題を主とするものであったことをうかがわせるからである。

光

貞

こうした甲之との交渉は左千夫に早速影響を与えるのであって、まず、甲之の「文学と宗教」が載った「馬酔木」二巻二号（明38・4）には

四月十九日を始めとして自今左名の如き会を設け候間

同志諸君の来会を望み候

●十九日会

一、本会は毎月十九日竹乃里人先生の忌日を以て「馬酔木」発行所に開く

一、本会は趣味と信仰との交話を目的とす

という告示が出される。「交話」とは辞書にも見えず耳慣れぬことばであるが、話し合いの意味で使ったものであろうか。趣味と信仰との関係についての話し合いをやったらしいことは、次の記事によって推察

できる。すなわち、「左千夫記」として「馬酔木」二巻三号（明38・5）に「十九日記事」が載っており、そこで

山田三子君がくる石原阿都志君がくる蔵真君がくる、夜に入つて近角常音君^{（アツメ）}三井甲之君がきた、大方一人か二人かと思つたに意外に来会者多く非常に愉快であつた。興に乗つて際限なく話した話は一寸書けない、趣味と信仰との関係などいふ問題は区域余りに広く、まとまつた話をするは頗る臆苦^{（アツメ）}である、是からは趣味の話信仰の話といふことにしようか、趣味と信仰とは一致するといふ人と一致せぬといふ人とあつた、何れにも理がある、信仰は縦的趣味は横的な感じもするが、そんな無雑作な詞で尽せるものであるまい、上代は趣味と信仰殆ど一致したようにも思はれる、たとへば、聖徳太子の如き、後世に至る程、信仰と趣味とは疎遠になつた様に思はれる、譬へば今の宗教家に趣味を解するもの極めて稀な如く、三井君の如き趣味と信仰と必ず一致せねばならぬといふ方であつた、兎に角趣味と信仰との関係に就て考究談話をやるといふことは、吾々が始めてであつて頗る興味あり且つ有益なことであらうと云ふ説は一致した、此問題に就て今暫く考究の上、議論を発表するといふ事で散会

とあることから大体が知られるのである。この記事からは、また、宗教問題に熱意を示してきた甲之が求道学舎を開いて他力信仰を説いた近角常観の影響を受け、甲之の誘いで常観もこの会に訪れたことを示している。

ここで近角常観について触れておくと、明治三年に滋賀県東浅井郡の真宗大谷派寺院西源寺に生まれた。二十二年、東京に遊学、第一高等学校を卒業し、二十九年清沢満之らと宗門改革運動に参加したが、

足引の山も輝く海も輝く御仏の光りてりみつる我胸の内

という二首の旋頭歌が採られたときで、その年にはほかに、翌、五月発行の十一号に「京都に陶つくる友に」として短歌二首、十一月発行の十四号に無題で短歌三首が掲載された。これらの中で、十号に載った「讃仏歌」がみずからの仏教信仰とそれからくる至福の境を歌ったものであり、十四号に載った三首も僧侶の学識を誇る態度を歌で批判しており、甲之の歌が宗教色の濃いものであることが注目される。

こうして三十七年四月発行の「馬酔木」第十号から歌が載るようになった甲之が左千夫に初めて会うのは、その年九月二十日、根岸の子規庵で行なわれた子規三年忌歌会の席のようで、それは明治三十七年九月二十八日の「日本」の甲之の歌や同年十一月の「馬酔木」の「正岡先生三年忌歌会」の記事からわかる。その後も甲之は、十月十六日に香取秀真宅で開かれた十月短歌会、十一月二十日に左千夫宅で開かれた十一月短歌会、十二月十一日左千夫宅で開かれた十二月短歌会と出ており、このいずれにも左千夫も出ているから、二人は会っているはずである。十月、十一月の歌会については「馬酔木」十五号（明38・1）に載った「十月短歌会」の記事で知ることができるし、十二月の歌会については

歌会近来何時も盛だ十一日八九人であつた大学の連中が熱心なの
ハ頼もしひ

と書いた十二月十三日付の節宛書簡、および同月十二日付蕨檀堂宛書簡などからわかる。

翌三十八年一月三日発行の「馬酔木」十五号に「紅葉」と題する二首の甲之の歌が載ったが、同月五日、彼は左千夫宛に四百字詰の原稿

用紙にして十五枚を越す長文の手紙を書き、左千夫は、これを二月十日発行の「馬酔木」二巻一号に「●雑言録 宗教と文学」と題して「某大学生」の署名で掲載する。この文章は

新年の御慶目出度申上候、

昨夜「新仏教」新年号を読み候所、今迄先生に対し宗教に関し色々出鱈目申上候が気になり候間申分け致度存候、御閑暇の節御読み下され御目にかかり候節御批評御教示願上度候

と書き出されており、これによって、今見てきたかぎりでは歌会に三回出席しただけの甲之と左千夫とが、その歌会の席であろうか、それとも別の機会に会うことがあったのであろうか、信仰について話しかつたらしいことがうかがわれる。この甲之の文章のあとに左千夫は以上予に宛たる手紙なり、説明解釈の空理よりは実験実行者たらんとの念に支配され居る予は此手紙に大なる同情を有するなりと付記して賛同の意を表した。

甲之がついで「文学と宗教」と題する論文を寄せると、左千夫はこれを「馬酔木」二巻二号（明38・4）に掲載し、今回も付記で

◎左千夫言ふ、宗教の意義、文学の意義、詩と人格との関係、内容と形式との関係、材料と語調との関係等説き得て遺憾なきを覚ふ、斯の如く各方面に渡れる見解上の一致を得たるは予の深き歡喜に堪えざる所なれば敢て一言を添ふ、

と述べて同じ信仰をもつ同人を得た喜びを隠さなかった。この甲之の論文を受け取った直後にあたる、一月七日付の久保田俊彦宛書簡を見ると、旧根岸短歌会員の歌会への出席がよくないことを述べたあとで、新しく加入した大学生たちが文学的素養をもっており、彼らが馬酔木の今後の「意外な新発展」に貢献するのではないかと述べ、甲之らに

を見て親しみを起したは悪くはない。只美男と見て親しまんとするは余りに下等である。」と攻撃を加えた。これを読んだ晶子の夫の鉄幹は、「かばかり正直に自家の魯鈍を表白せるものは珍らし。詩を評せんならば、せめて日本語だけなりとも修養せよ」と評したのである。

このように左千夫が晶子の歌に批判を加えたことの当否はしばらくおくとして、彼が執拗に攻撃せずにはおれなかった理由を考えてみるならば、敬虔な信仰を持つ左千夫には崇敬すべき仏像を普通の男なみに美男などと云々するのは許すべからざることと映ったものである。そして晶子のこの一首と対比させることによって左千夫の「鎌倉なる大仏をろがみて詠める短歌十三首」に仏教信仰がいかに濃く流れているかを知ることができるのである。

威 光 貞

左千夫の、この十三首の連作は賛仏歌ともいべきものであるが、彼は「新仏教」に同種の連作を発表している。それは四十年四月一日発行の八巻四号に載った「釈尊降誕祭之歌」と題する十二首で、その中には

ひんかしに陽炎^{かきろひ}立ちて楽しみのけふの八日ぞはや明けにける

人の世のよろづの事の物思ひ今朝の光にとはに消えなむ

かきろひの空に花降り風かをり御仏まつる日とはなり来も

嬉しさに心さおどりわれ人は御名を唱へて起ちあするかも

八十国の悦ぶ声は天地に満てどよめり南無さか如来

といった歌がある。『増補左千夫歌集』(岩波文庫)、『左千夫歌集合評』

(八重山書店)、『左千夫短歌合評』(アララギ)のどれにもはいっていないことが示すように左千夫の歌として重んじられない作品ではあるが、四月八日の花祭りを前にして発表されたこの連作も彼の信仰と深くかわるもので、四十年三月十一日付書簡で「新仏教」の編集に

たずさわっていた高島米峰に宛てて

先つ大兄に感謝する。大兄の要求なかりせば、僕は恐らく、此歌を作らなかりしならむと思へばなり。僕常に歌を作り居るも、今回の如く、作り終つて後の、愉快なる精神の波動、長かりしことはあらざりき。仰山に自讃するほどの、佳作なりや否は後の問題なるべし、只僕の信仰心のあるくば、此歌は出来な思はれる。去年の僕には逆ても此歌は出来ないと信ずるから、これだけを大兄に告げて感謝するのである。

と述べている。この手紙を読むと、この賛仏歌が作られたきっかけは高島米峰の求めによるものであること、実際作られたのは降誕祭の日でなくそれより一月ほど前だったにもかかわらず彼がこの歌を作ったころいかに宗教的昂揚を感じていたかということを知ることができる。この歌も彼の言うように信仰なしでは生まれなかった作品と見られる。

今まで見てきたように明治三十三年以降「新仏教」に作歌を発表していた左千夫は三十六年にはその編集員に加わり、文章も発表するとともに例会出席等を通じて会の有力なメンバーである高島米峰、杉村楚人冠らと親交を結んで、宗教との接近を深めてゆくのであったが、彼のところへ三井甲之が入門するに及んで左千夫の信仰は急激な深まりを見せる。

甲之が「馬酔木」誌上に初めて登場するのは三十七年四月発行の第十号の左千夫選歌欄に「賛仏歌」と題して

青山をから山なさむ火をも過ぎりて。慈悲の国、力の国にいたらん我は

にしておられると歌い、露坐のまま「万代までに」永劫にそのお姿を保たれることであろうとして賛美をしており、作者の長谷の大仏に対する崇拜の念なくしては生まれ得なかったと考えられる。その点は

みもすそに手をふりしかは全き身の血汐し澄める心地しにけり
の歌になると、大仏の御裳の裾に手をふれたところ全身の血が清められた心地がしたことだと、自身の体験した感動を直截的に表出した歌であるだけに、先の歌よりもさらに宗教的感情がはつきりと出ているといえよう。

ここで、この歌の宗教的感情の質というものについて考えてみると、「全き身の血汐し澄める心地しにけり」というのは、平生、自分の血の濁りを切に感じて嘆く心なしには発し得ないところのものである。もっとも、歌の素材となった鎌倉の長谷の大仏が阿彌陀如来像であったから、それにあわせて意識的に浄土教的宗教感情をもって作歌したような場合も考えられるかもしれない。しかし、左千夫は後年も

むらぎもの弱き心はもろ／＼に背き能はねば常囚獄とこひとやわれは

明四三

わが罪をわが悔ゆる時わが命如何にかならむ哀しよ吾妹

明四四

と、煩惱に迷う弱い心を嘆く趣の歌を詠んでおり、しかもこれらの歌が自らの心境の告白と見られる点からすると「みもすそに」の歌が意識的、作画的に浄土教的宗教感情で作歌したと見るよりもそうしたものを彼が信仰として既に持っていたと考えられる。そして大仏を詠じた連作は次に自らを濁世に生きる罪障深き身として仏前にひざまづき、

青山のかきのまほらに万代といます御仏大きみほとけ

万世にさのこりまして汚世を救ひたまはね大きみほとけ

と仏を賛嘆し、救済を願っている。この歌の声調は、仏足石歌を思わせるものがあり極めて荘厳であるが、それは作者の仏に対する敬虔な心情を反映したものと見てよいだろう。

ちなみに鎌倉の大仏を歌ったものに与謝野晶子の

鎌倉やみほとけなれど釈迦牟尼は美男におはす夏木立かな

『恋衣』 明三八・一

がある。この歌は、もとは明治三十七年八月発行の「明星」に

鎌倉や銅かねにはあれど御仏は美男におはす夏木立かな

として発表され、それを改めたのが前の形であるが、左千夫は「明星」に「鎌倉や銅にはあれど……」の形で載ったとき、三十八年一月、「雑言録」(二)「(馬酔木 十五号)」で

近い明星にも「銅にあれと御仏は美男におはす云々」と云へる歌あり、是等の用語思想を都合点ともエラガリヨガリとも思はざる人と如何にして詩を談じ得べき、況や其口調を真似して悦び居る輩に於てをや

と晶子の歌が仏像を美男云々と容貌を問題にして信仰を欠く点を批判した。

これに対して大町桂月が「鎌倉大仏論」(「太陽」明39・2)を書いてこの歌を取り上げ、晶子が大仏を美男としたことを「不埒にあらず、淫乱に非ず」と述べ「日本に歌ありてより幾千年、晶子出て、はじめ、斯かる、観察鋭く、理想高く、而も大胆なる歌あり。この歌の生命は美男の一語に在り。」と激賞すると、左千夫は翌月再び「与謝野晶子の歌を評す」(「馬酔木」明39・3)で「何か桂月は、此の歌に就いて大いに晶子の見識を云々したと聞くがそれが本当ならば、桂月といふ人は意外に解らぬ人だ。」と述べた上で「晶子の詞は能く晶子を顕して居る。美男の一語は晶子が日常の嗜好を深刻に画いてゐる。」「大仏

ない方がよいから、嵐よ吹きに吹いて散らしてしまえと歌っており、一連の中には桜花の美しさをしみじみ眺めるといった態度の歌は一首も見当らず、東北地方の飢えに泣く農民を思い、花を見て喜ぶ気持ちにもなれないと、悲痛な感慨を詠嘆する種類のものばなりとなっている。

ところで左千夫が本格的に作るようになるのは子規に入門した三十三年からであり、その三十三年以後の桜を詠んだ歌を見てみると

七日会一周年記念の宴 (三首)

白妙に匂ふ桜の木の下に人を並べて写真にとりぬ 明三三

小金井遠乗 (六首)

咲きをゝる桜のもとに御しるしの幔幕うちてうたげすらしも 明三三

桜花 (十八首)

吾庵の檐の端近く八重咲の牡丹桜の花咲きにけり 明三三

神武天皇祭の日桜花を詠める (九首)

夜の宮につかへつかまつるとはふりらが取るともし火し花にうつろふ 明三四

桜 (十首)

しからきの陶焼く岡のかまとべの八本桜花咲きにけり 明三四

雨中花に対してよめる (九首)

花ことに露の白玉ふふみたるくはし桜に夕日さしくも 明三四

新居の桜 (連作十首)

さきさかる花のあかりに新つきの家居かぶひいやてりまさる 明三五

のように三十三年には二十七首、三十四年には二十八首、三十五年は十首と見え、そのいずれもが春の日にのどかに咲く桜の美しさを賛美し

た種類のものとなっている。このように明治三十三年から三十五年まで桜を賛美する歌を詠んで来た左千夫が、三十六年には、そういう種類の歌を一首も詠まず東北地方の飢えに苦しむ人々のことを思うとのどかに花を見る気にもなれないから、桜などない方がよいと桜を拒否する歌を詠んでいるのは、どちらも桜というものの存在に心を寄せている点では共通であるが、やはり一大転換である。

その転換の事情を考えてみると、仏教清徒同志会への入会に際して「酒」の害を訴える歌を機関誌「新仏教」に寄せ、翌年には足尾銅山の被害者に同情して長歌を発表してきた作者が、さらに社会的関心を深めた結果がそれであったといえるだろう。

もっとも、同志会の活動は社会運動も活発に行なったけれども、その目指すところは綱領の第一条に「仏教の健全なる信仰を根本義とす」と謳うとおり信仰問題にあったように、左千夫が「新仏教」に発表した歌にも社会的関心をにじませる歌とともに、信仰とかわる歌も見られる。

まず三十四年二月、「新仏教」二巻二号に「寺」と題して発表した
たかいらかの御堂の上に二つゐし鳶とひ去りてゆくゑしらすも

天雲に秀枝ましはる森のうちに塔もふりたり堂もふりたり

を含む九首は素朴ながらも宗教感情を漂わせているが、次に、もっとはっきり信仰の念のうかがえるところの、三十五年四月に同誌三巻四号に発表した「鎌倉なる大仏をろかみて詠める短歌十三首」を見てみたい。この歌は鎌倉市長谷の高徳院の庭に露坐する阿弥陀仏に詣でての感懷を詠じた、十三首からなる連作であるが、その第一首は

鎌倉の大き仏は青空をみかさときつゝ万代までに

という歌で、長谷の大仏が屋根も天蓋もないことを早春の青空を天蓋

霧降瀧

きりふりの瀧の岩つばいや広み水ゆるやかに魚あそぶみゆ

と比べてみると、後者が自然の対象を冷静に余裕をもって眺め、情景を視覚的に写すことに成功しているのに対して、「酒」の歌は第一首の場合、「やゝ酔ひて」と初めのうちは人をののしっていたが「痛く酔ひて」のちはひとりごちつつ泣く、第二首では「右をそしり」、「左をあさける」、第三首では「形頼るる」ごとく、「心もいたく頼れて」いる、というふうにとどの歌を見ても対象を図式的にとらえており、酒に溺れた者の醜悪さを歌にしようとした作者の意図ばかりが先走っていて、その姿をいきいきと描き出すことはできないで終わっている。その点で「酒」の歌は観念的で、読む者に訴える力に欠け、文学的には失敗作と見なさざるを得ないものであるが、「社会の根本的改善を力む」という仏教清徒同志会の設立の趣旨にもとづいて、高島米峰や渡辺海旭らを中心に禁酒運動が当時展開されつつあったという背景を考えると、左千夫の寄せた「酒」の歌はその趣旨に替同しての作であったということになる。

左千夫は翌年の十二月には同誌の二卷十三号に「鉍毒被害の民を憐みて詠める歌」と題する長歌一首を発表している。周知のように足尾銅山はその発展につれて鉍毒の被害を渡良瀬川沿岸の農民に及ぼし、そのため農民は営業停止を請願し、栃木県選出の立憲改進黨代議士田中正造も明治二十四年以来しばしば議会に質問書を提出、操業停止を要求した。二十九、三十年の大洪水は広範囲に被害を与え、沿岸の農民は大挙して上京する。明治三十三年、栃木・群馬の農民は四度目の大衆請願を行ない、警察・憲兵と衝突を繰り返すが、正造は十月二十三日、意を決して議員を辞職し、ついに三十四年十二月十日、議会開院式よ

り帰途にあった天皇に鉍毒事件について直訴を行なっている。

このため世論も沸騰し、基督教婦人矯風会や学生団体をはじめ、内村鑑三・安部磯雄らキリスト教徒、木下尚江・幸徳秋水ら社会主義者も熱心に応援した。「新仏教」もこの事件については社説を発表、鉍毒被害民救済義捐金を募集するなど積極的に取り組んでいる。左千夫が長歌一首を発表したのは三十四年十二月一日で田中正造によって直訴が決行される直前のことであった。

翌三十五年は天候が不順で東北地方は大凶作に見舞われ、青森・岩手・宮城・福島各県では平年作の半分前後の収穫しかなく、三十六年になると小作農は食糧を食い尽くして同地方は飢饉に陥る。左千夫はこの年の春、「新仏教」四卷五号に「花下所感」と題して

くぬちうちに飢泣く民のあると聞けば花を過ぎつゝ楽しとも見ず
千万のむつの同胞飢に飢なげく此春花何にさく

花は只心もあらず酔騒ぐ人し悲しも此春にして

よるゑやし花は見るともむつのくの飢泣く民に心割なん

雨嵐吹きてふきふけたのしとおもはぬ花はあらぬまされり

の五首を発表している。

右に示した第一首では、同じ日本に食に飢えて泣く人々がいると聞くので今は桜の盛りの時であるけれども楽しんで眺める気にもなれないと心を痛め、第二首では、飢えて嘆いているこのような時に桜はどう思つて咲くのかと無情の桜にまでも恨みを寄せた上で、第三首は、東北地方がこのような深刻な状態にあるこの春に我を忘れて花の下で騒ぐ人を見て悲しむ歌になっており、第四首では、その人たちに向かい飢えて泣く同胞に同情を寄せるよう希望、第五首では、このような悲しみを桜を見て楽しむ気持ちにもなれないのであつてみれば桜など

ものであるが、三十六年三月には「新仏教同志会」と改称している。会は綱領として

一、我徒は仏教の健全なる信仰を根本義とす
 一、我徒は健全なる信仰知識及道義を振作普及して社会の根本的改善を力む

一、我徒は仏教及宗教の自由討究を主張す

一、我徒は一切迷信の勦絶を期す

一、我徒は従来の宗教的制度及儀式を保持するの必要を認めず

一、我徒は総べての政治上の保護干渉を斥く

の六項を定めている。毎月、例会を開いて宗教問題について自由な討議を行ない、明治三十三年七月に機関誌「新仏教」を創刊、言論活動を展開して仏教のあるべき姿について提言を行なうとともに既成仏教教壇を激しく批判し、その綱領に基づいて社会的な活動も仏教団体の中では目立って活発に行なった。今、その主なものを見てみると、まず国家権力の宗教干渉に思想の自由を保持する立場から反対、三教会とも宗教に対する政治の干渉として指弾した。日露戦争に対しては厭戦的な立場を取り、また鉱毒被害民救済、廃娼、婦人解放、禁酒禁煙等の運動を提唱し、乃木希典の殉死を批判するなど広汎な分野にわたって活動を展開している。

この仏教清徒同志会の機関誌「新仏教」が明治三十三年七月に創刊されると、左千夫は八月の第二号から作品を寄せるようになり、その年には四回、三十四年には六回、三十五年には三回と短歌を発表し、三十六年二月十四日、神田一ツ橋の学士会事務所を会場として開催された第二十一回通常会で「予が宗教観」と題し講演をしている。

そして、三十六年の四月には同志会の同人に加わり、「新仏教」の編集

にたずさわるようになるが、その月発行の四巻四号には「受動的宗教家」と題する文章を発表している。左千夫はこの文章で一般の仏教寺院は家内安全、無病息災を祈禱し、葬儀を行なう営業団体の如き観を呈し、その一方で一部の宗教家は社会に対する働きかけを忘れて教理の議論にふけっているかに見えるとし、これらは共に信徒を導く姿勢に欠けるものであると批判している。標題の「受動的宗教家」というのは、専門家ではなくて他から教えを受ける立場にある一人の仏教信徒からの訴えの意のようで、左千夫はそうした信徒としての信念を訴えたのである。恐らく二月の通常会における講演もこれと同じ趣旨のものであったろうと考えられる。

つづいて三十六年十月発行の四巻十号においては「動作の趣味」という文章を書いて、仏教がキリスト教に比して社会的活動に欠ける点を指摘、これに積極的に取り組む必要を説いており、社会人の立場から僧侶に対しての要望を提出している。

ここで「新仏教」に発表した歌について見ると、その発表回数は二十八回、長歌八首、短歌百八十一首、新体詩一篇となっている。

その中の「酒」六首について見ると、これは明治三十三年八月発行の一卷二号に発表されたものであるが、その歌は

やゝ酔ひて人をのゝしり痛く酔ひてわれと泣きつゝ独りごつかも
 右をそしり左をあさけり酔しれてわめくしやつらは猿にも劣れり
 酒に酔ひて形顔るゝその如く心もいたく顔れてあるべし
 といったもので、これを同年の作である

再度吉野園に遊びて

花あやめしら／＼見ゆる田の上を一つ螢のとびわたるかも

左千夫短歌と宗教的風土

貞 光 威

Reflection of Religious Sentiment
on the *Tanka* of Sachio Itoh

Takeshi Sadamitsu

伊藤左千夫が属したところの根岸短歌会の初期の歌人たちを見ると一般にそれほど仏教に信仰を持った者は見当らない。指導者であった正岡子規は「病牀六尺 四十」（「日本」明35・6・21）において

○「如何にして日を暮らすべき」「誰か此苦を救ふて呉れる者はあるまいか」此に至つて宗教問題に到着したと宗教家はいふであらう。併し宗教を信ぜぬ予には宗教も何の役にも立たない。基督教を信ぜぬ者には神の救いの手は届かない。仏教を信ぜぬ者は南無阿彌陀仏を繰返して日を暮らすことも出来ない

と述べている。子規はこれを書いたのち約三ヶ月後には世を去つていたのであるが、この前後の記事を読むと彼は頻死の病牀にあって絶えず襲う病苦と煩悶に身心をさいなまれながらも最後まで信仰というものは持たないまま死んだようである。子規の弟子で左千夫が親しい交わりを結んだ長塚節も、三十三歳で結核という死病に襲われ、彼の文章や歌などを見るとその苦悶は深かつたようであるが、死に至るまで特に宗教に心を寄せた様子は認められない。他の歌人も大同小異で、子規在世当時の根岸短歌会の会員たちには全般的に見て宗教問題への特別な関心は認められない。

ただ、その中で左千夫だけは、明治三十三年八月、仏教清徒同志会

の機関誌である「新仏教」に歌を発表したのを手はじめに、同誌にしばしば作品を掲載、三十六年四月にはその編集員となり、宗教・家庭・文芸等に関する文章を執筆するとともに、例会に参加、高島米峰・杉村楚人冠らと親交を深めて宗教問題について深い関心を持っていた。また、三十八年、彼のもとに三井甲之が入門するに及び、宗教への関心はとみに深まり、親鸞聖人の教えを信仰し、歎異抄を愛読するようになり、毎月十九日に自宅で「趣味と信仰との交話を目的」とする「十九日会」を開くかたわら近角常観に近づき、彼の主宰する仏教雑誌「求道」と関係をもつに至る。

彼の宗教にかかわる活動としては右に挙げたことのほかに、明治三十三年十一月から三十五年三月までの間に十一回和歌を発表している宗教雑誌「仏教」との関係、および、明治三十六年に毎号短歌欄の選を行ない選者詠を発表することの多かった雑誌「加持世界」との関係なども考えられるけれども、小稿においては、彼の文学に大きな影響を及ぼしたと見られるところの先の二つの問題にしばらくにして、最初に高島米峰らの仏教清徒同志会の会員との交渉ならびにその機関誌「新仏教」との関係について触れ、ついで三井甲之と、彼の導きで近づくようになった近角常観ならびに常観の発行した雑誌「求道」とのかかわりについて検討して、左千夫短歌とその宗教的性格との関係を考察することにした。

ここで、まず仏教清徒同志会について説明すると、この会は明治三十二年二月、境野黄洋、高島米峰、杉村縦横（楚人冠）、田中治六、安藤弘によって結成されている。「清徒」と名乗ったのは、英国のピュリタンにならって近代市民道徳を建設しようと企図したことにもとづく